

参加者の感想

- このフォーラムに参加し、色々考えさせられました。人と人の繋がりが当たり前ではなくなっている事を寂しく感じました。私は今、一人暮らしをしていますが、家族とまめに連絡をとっています。用がなくても連絡をとることは、大事だと思いました。それから、今は未婚者が増えているが、将来絶対に結婚したいと思いました。又、フォーラムに参加して、自分の意見や考えを皆の前で言えるようになっていきたいと思いました。このようなフォーラムがあればまた参加してみようと思います。
- 福祉フォーラムに参加し、大人の意見や学生の意見が同じ時に同じ場所で飛び交い、とても良い刺激を受けました。講演を聞いて、自分には何が出来るか、出来る事から始めようと思いました。
- 温かい活動を聞かせていただき、ありがとうございます。「継続は力なり」という言葉を思い出しました。是非、他の地域のためにも、活動を続けてください。
- 難しい内容でしたが、考えさせられることが多かったです。日々の仕事の中でも、地域社会について考えながら、取り組んでいきたいと思っています。
- お話をいろいろと聞かせて頂いて、とても勉強になりました。防災について、何気なく生活しているだけでは気づけないことを、学べたのではないかと思います。また、現場で働いていらっしゃる方達の話の交えながら聞くことができたので、良い経験が出来ました。

● コラム ●

瀬田キャンパス秋の実り

11月の瀬田キャンパスは、一気に秋の様相となった。サクラやケヤキの紅葉・ブナの黄葉が落ち着いた色調の校舎に映え、なかなか美しい。キャンパス内の里山はドングリが豊富で学内のあちこちに転がっているが、実は栗も転がっていることを皆さんはご存知だろうか。場所はRECホールの北東。かなり小ぶりで皮をむくとドングリほどにしかならないが、味は確かに栗である。

お隣のびわこ文化公園内には、通学途中にも見える、大津宮時代の製鉄炉跡「源内峠遺跡(国史跡)」がある。燃料となる森林資源が豊富であることが製鉄を行うポイントのひとつ、ということからすると、この里山も、かつては製鉄炉に関わる人々の生活と深く結びついていたのだろう。7~8世紀の人々も同じ栗を味わっていたのではと思うと、その小ささに拘わらず感慨深い。残念ながら今年の栗はもう終わりを迎えるが、次の実りの季節には講座参加に少し時間の余裕をいただいて、キャンパス内での栗拾いなどいかがであろうか。(土田)

*「源内峠遺跡」については、滋賀県文化財学習シート「遺跡編」の記述を参考にした。
http://www.pref.shiga.jp/edu/content/10_cultural_assets/gakushu2/data/2019/index.html



福祉フォーラム通信

Vol.10

発行日：2010年12月20日
 発行元：龍谷大学福祉フォーラム



龍谷大学の地域貢献事業として ~より参加しやすい福祉フォーラムをめざして~ 龍谷大学福祉フォーラム 副会長 筒井のり子

龍谷大学福祉フォーラム(1998年に設立)は、2007年に新理念のもと再スタートをきって、はや3年が経ちました。新理念とは、「福祉」という切り口から、地域住民、課題を抱える当事者、専門職、学生、さまざまなNPOで活動する人々、さらに行政や企業など多様な人々が「協働」していく場をつくり、「共生」をキーワードに新しいまちづくりをしていこうというものです。

そのため、年1回テーマを決めてフォーラム(大会)を開催するとともに、「共生塾」や専門セミナーといった連続講座を昨年度末までに計10種類開講してきました。毎回、どのようなテーマ・講師にするか、そしてどのような切り口で課題にアプローチするのかを、私たちフォーラム委員は、真剣に議論してきました。

というのも、この3年、私たちの暮らしを取り巻く状況は大きく変化してきたからです。2年前のリーマンショック以降の深刻な不況による影響は、就職難、失業者の増加、ホームレスの若年化、子どもの貧困などじわじわと私たちの暮らしに迫って来ています。自殺者数も増加する一方です。子ども虐待事件も後を絶ちません。また、この夏、100歳以上高齢者の所在不明問題が私たちに大きな驚きとやるせなさをもたらしました。

「福祉」は一部の人の問題、あるいは行政や専門職・関係者だけが取り組むものという意識のままでは、もはや社会が機能していかない状態になっています。市民一人ひとりが考え、行動し、多様な人々とのネットワークのもとに解決策を模索していく取り組みが求められているのです。

まさに、本学福祉フォーラムは、そうした各自の気づき、出会い、協働のきっかけづくりを目指してきました。しかも、福祉系学科の単独の取り組みではなく、「大学」全体として「福祉」という、人間にとって社会にとって根源的なテーマにチャレンジしてきたことは、他大学と比較しても誇れることだと思っています。本学の建学の精神を具現化した事業といえるでしょう。

しかし、残念ながらフォーラム、講座等への参加者は、まだまだ限られたものでした。瀬田キャンパスのアクセス問題や受講料、広報力などの影響もあったと思われます。いずれにしても、「福祉」にそれほど強い関心がない人も含めて、より多くの人々に足を運んでもらい、ともに考え合う機会を作っていく工夫が求められていました。

そこで、2010年度より「福祉フォーラム事業」は、改めて本学の地域貢献の重要な柱の一つと位置づけられることになりました。それによって、より多くの人々に参加していただけるような受講料設定(一部、無料も)、企画内容の充実のためのメンバー強化、広報媒体の拡充などに取り組みました。その結果、10月3日に開催した「福祉フォーラム2010」には、250名もの参加者を迎えることができました。

社会経済情勢の不安定化、人々のつながりの希薄化が進む現代社会において、このような「福祉フォーラム事業」を展開していくことは、社会福祉の研究者や学生、研究成果や情報、ネットワークの蓄積がある龍谷大学ならではの社会貢献活動ではないかと思っています。

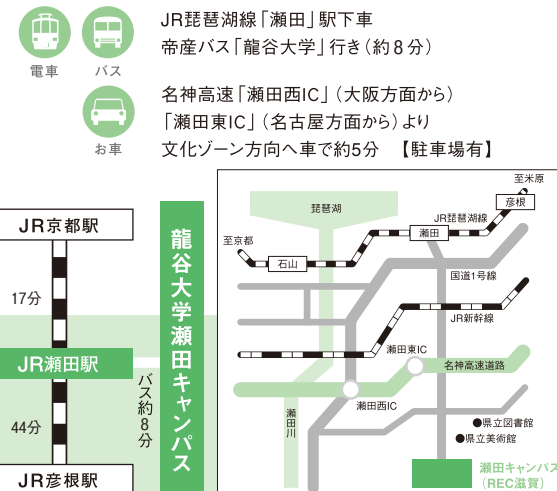
会員の皆様をはじめ、より多くの方々和社会福祉や地域社会のあり方について考え合い、協働が可能となるよう努力していきたいと思っています。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

福祉フォーラム 2010年度 担当教員

- | | |
|-----------------------|-------------------------|
| 大友信勝(社会学部 臨床福祉学科) ※会長 | 土田美世子(社会学部 地域福祉学科) |
| 川田響音(社会学部 臨床福祉学科) | 筒井のり子(社会学部 地域福祉学科) ※副会長 |
| 工藤保則(社会学部 社会学科) | 山口浩次(大津市社会福祉協議会) |
| 白石正久(社会学部 臨床福祉学科) | 山田容(社会学部 臨床福祉学科) |
| 津島昌弘(社会学部 社会学科) | |

お問い合わせ

龍谷大学福祉フォーラム事務局(REC滋賀内)
 〒520-2194 滋賀県大津市瀬田大江町横谷1-5
 TEL/077-543-7744 FAX/077-543-7771
 E-mail/r-fukushi@ad.ryukoku.ac.jp
 ホームページ/http://rec.seta.ryukoku.ac.jp/fukushi/



龍谷大学福祉フォーラム2010 「無縁社会を生きる一つながりの再生と創造」 を開催しました。

2010年10月3日(日)

テーマ「無縁社会を生きる一つながりの再生と創造」
講師:鎌田 靖 氏(追跡！A to Z、NHK解説委員)

本年度の福祉フォーラムでは、NHK解説委員で「追跡！A to Z」のキャスター鎌田靖さんを講師にお招きし、「無縁社会を生きる 一つながりの再生と創造」と題した講演をしていただきました。鎌田さんは、ご自身の取材体験から無縁社会の象徴とも言える孤独死の実態や無縁化の背景にある様々な要因について触れられ、無縁化された人達を対象とした新たなビジネスが登場していること、さらに今後いかに無縁社会と向き合うかまで示唆にとんだお話を展開されました。

その後の質疑では、会場から活発な質問、意見が投げかけられました。プライバシーを過度に重視する社会への危惧、また挫折を踏まえて再度立ち上がってきた経験なども語られ、活気ある雰囲気の中で終了となりました。その後の各分科会に先立つ問題意識を共有し、各分科会のテーマを考えていく指針を得られ、大変意味深い一時でした。

参加者は、地域住民の方が中心でしたが、学生も多数混じり、まさに老若男女が集い同じテーマを考える貴重な機会となりました。このように多様な人達が地域社会の問題を共有する場を提供できたことは、本フォーラムの主旨である「共生」と「協働」に向けた意義ある内容でした。

鎌田さんには、貴重なお時間を割いて東京から駆けつけていただきました。この場を借りて改めて感謝申し上げます。



「アートで縁づくり」 講師:丸山 桂 氏(アーティスト/ロケット探偵団)

「アートで縁づくり」部会の講師は、若手人気アーティストの丸山桂さん(ロケット探偵団)にお願いしました。「人とつながるアート」を標榜されている丸山さんが、これまで経験してこられたことをユーモアを交えながら話されることから部会はスタートしました。そのお話で会場のムードがやわらかくなったあと、参加者のみなさんによる「アートで縁づくり」実践へと移り、まずは「今までの、あるいはこれからの、出会いや別れなどを意識した上での自画像」を描いてもらい、その次に「自画像を書くためにいろいろ意識した際に、一番気になった人」を描いてもらいました。

それらの絵を笑顔で見ている丸山さんが最後にライブペインティングを行い、参加者のみなさんから大きな歓声があがって、部会は終わり…となるのかと思っていま



たら、まだ先がありました。会場に5m×5mの大キャンバスがあらわれたのです。
その大キャンバスに、丸山さんの絵を囲むように参加者のみなさんの絵——今の自分、過去の自分、将来の自分、出会った人、別れた人、家族やペット——をはっていくと…大キャンバスが大曼茶羅となったのです。その瞬間、参加者の皆さんからさらに大きな歓声があがりました。

大キャンバスにあらわれたのは、そして会場にうまれたのは、それはまさに「ご縁」でした。

「マンションでの助け合い活動を通じた縁づくり」 講師:ルネ大津くらしを支え合う会

「マンションでの助け合い活動を通じた縁づくり」セッションは、「ルネ大津くらしを支えあう会」の市吉淳子さんの報告、大津市社会福祉協議会の山口浩次さんのコーディネイトで進行されました。参加者は70名となり、たいへん盛況でした。

ルネ大津は、1976年より入居が開始された総戸数422戸の大規模マンションです。入居当初から管理組合長、自治会長の「ルネはひとつ」「マンションのモデルに」という掛声のもと、「つながり」を大切にしたい住民の取り組みが行われてきました。しだいに住民の高齢化が進み、定年退職を迎える方も増えるなかで、「終の棲家になるように」を合言葉に、改修工事も無難にのりこえてきたそうです。2000年になって、「支えあい」をテーマにした講演会の開催を手始めに、有志での「ルネ大津くらしを支えあう会」の発足へとこぎつけました。サロンに集っての歌う会や誕生日を祝う会、ごみ出しや高齢者・子どもの見守りの手伝い、アルミ缶の回収整理、花壇の手入れ、手芸や健康の教室の開催など、住民の要求を大切にしたい取り組みを、コツコツと続けてきました。長く続けることを大切に、一人で頑張りすぎない、少し先のことを見通して学習して備えることなどをモットーに、取り組みは、まだまだ続いていきそうです。

このような市吉さんのお話を受けて、会場からは、管理組合や自治会との協力関係はどのようにするのか、運営費はどのように捻出するのかなどの質問や、マンション生活のことをもっと知りたいという発言がなされ、ざっくばらんな雰囲気での討論ができました。おそらく、このような取り組みは自然発生的に芽生えるものではなく、将来を見通す先見性や学習に裏打ちされたリーダーシップがあってこそその発展であったと思われる。



「地域防災活動支援を通しての縁づくり」 講師:井岡仁志 氏(滋賀県高島市社会福祉協議会) ゲストスピーカー:山本昇子 氏(民生委員、高島市災害ボランティア活動連絡協議会委員、被災経験者)



まず、井岡氏より高島市内で実施した「HUG(避難所運営ゲーム)」で、よかれと思って認知症高齢者や知的障害者の家族を教室へと集めてしまうという結果を見て、「配慮と排除は紙一重」と感じたとの話がありました。日頃から知り合っていれば「一緒にいよう」ということになるのではないか、日常の延長線上に災害時の対応力がある！と痛感されたそうです。

そこから、「障害者市民のための防災こんだん会」や「当事者による"ヨモギ湯"」の開催、「重度心身障害者・難病者の個別支援プランづくり」ヘラウンドテーブルづくり「防災訓練を通じたグループホーム利用者と地域の関係づくり」などを実現されていった経過が紹介されました。

続いて、山本氏より被災経験を通しての地域でのつながりづくりの重要性について話がありました。

その後、8つのグループに分かれて、「地域防災力+福祉力アップのための縁づくりワークシート」をもとに、話し合いを行いました。学生からシニアまで世代を超えてのディスカッションに、「励まされた」「ぜひ地元で行動を起こしたい」といった感想が寄せられました。

参加者の感想

- どうしたら無縁社会が無くなるかは分からないが、人との繋がりは大切だと思いました。一人で苦しんでいる人が参加しやすい形にしてほしいです。今、自分たち一人一人に何ができるか、まず自分の家族や人間関係を大切にしようと思いました。
- 無縁社会という言葉を知り、この問題は他人事に出来ない問題として日頃より関心を寄せていました。これからの時代、20代～30代の人達にとって、より切実な問題になると考え、参加しました。今回聞いた内容を参考に、これからの時代を生きる私達は、無縁社会に向き合い、取り組んでいかなければならないと再確認しました。
- 講演を聞いて、社会がこんなにも深刻に無縁社会が進んでいる事を知り、他人事に思えませんでした。核家族の増加は、今後「無縁状態」に陥る可能性があると思います。こんな世の中だからこそ、今少し立ち止まって考えなければなりません。